

---

# 星のような明かりがひとつ

このはな さくら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

星のような明かりがひとつ

### 【Z-ONE】

20979Y

### 【作者名】

「のはな さくら

### 【あらすじ】

僕はヤツと河原で石投げ競争をするのを常としている。それは小学生時代から変わらずに、高校生になった今でもつづいている。だけど、僕はある悩みを抱えていた。ヤツはそんなオレを「ぜいたくだ」と言つけれど、僕には神か悪魔の仕業だとしか思えなかつた。

ウソだウソだウソだ。絶対ウソだ。こんなウソに決まっている！ じゃなければ、神か悪魔のどっちかが僕をハメようとしているんだ。

だけど、そうは行かない。上手く乗せられて、たまるもんか。

「……って言つてもねえ。選ばれちゃつたんだから仕方がないよね。  
半田クン、いい加減にあきらめたらア、ツとオウツ」

アンダースローで放られ、水面を飛んでいく石つぶて。ポチャン、  
ポチャンと二回、突き刺さるよつに離着水を繰り返したあと、三回  
目にボツチャンと川底に沈んだ。

「あーあ、失敗だ。つかしーな。すっげー久々だから、手元が狂つ  
ちゃつたのかなあ

投石を終えた実人<sup>みひと</sup>が、不思議そうに首をかしげる。

こんちくしょう。他人事だと思って、ＫＹなヤツめ。

僕の恨めしい視線を氣にもかけず、ヤツはコキコキ肩の骨を鳴ら  
した。関節の具合を確かめるかのように大きく右腕を振りかぶつて  
おろす。

風を切つて空気を分断し、ヒュンと音がした。この間までギプス  
をしていたとは想像できないほどの力強い音だ。

「オイ、治つたからつて乱暴にしていいのか。また痛めても知らね  
ーぞ」

「心配するな。オレの肩はそんなに、ヤワじやねえ」  
僕に向かつて、ヤツはニッと笑い、丶サインをした。

辺りは、すでに夕暮れ。雲が薄く棚引いていたけれど、真っ赤な  
夕日が川の上に架かっている橋の影をくつきり落とした。  
僕たち二人は、橋の下にある河原で時を過ごしていた。

部活帰りの日でも、そうでない日でも、土手の下まで駆け下りて石を拾い、飛ばしつゝ競争をするのを常としていたのである。

小学生時代からずっと同じ学校、同じ部活、同じ範囲を縄張りにしていたので、牽制というか、強さを誇示するとでもいったような、そういう意味合いがあつたのだと思つ。

とにかく、僕と実人は今でも変わらず、ガキだったのだ。

「治つたんなら、おまえが出ればいいじゃん。ヤダよオレ、一人で行進するの」

二日前に降つた雨の影響だろう。今日の川の流れは速かつた。このまま僕も流されていってしまうような気がする。

「情けないこと言つなよ。ぜいたくなんだよ、おまえ。オレだつたら、みろこんで出場するだ

やはり気になるらしく、実人は何度も右の肩をさすつた。ピッチヤーをやるために鍛えてきた身体だ。それなのに肩を痛めたせいで、今大会は補欠だつた。言葉のウラにある悔しさが本物であることを僕は知つている。

「そうかな」

「ああ、ぜつてーそうだよ。だつて、あの甲子園なんだぜ。代表じゃなくともイイじゃん。テレビに映るんだし」

「それはそうだけどさ。だけど……」

実人の言いたいことはわかつてゐる。昨年度の優勝校なのだから、胸を張つていけばいい。でも、それは僕たちの実力じゃない。センパイたちがやつとの思いで勝ち取つた栄光と優勝旗だ。

センパイに続けとばかりに猛練習してきたけれど、僕達は栄光を勝ち取ることができなかつた。ポツと出の名前すら聞いたことがない新設校に予選で敗退した身なのである。

そのため、僕はたつた一人で甲子園に行つて優勝旗を返還する、という大役を仰せつかつてしまつた。アイツは今年出場できなかつた可哀そうなヤツだと、他のヤツラに憐憫の目を向けられるハメに

なつたのだ。

こんなに屈辱的なことつてない。たとえ神や悪魔の仕業だとしつて、到底ガマンできないことだ。

「ああ、なるほど。わかった！ おまえ、だつせーとか、カツコわるーとか、そう思つてんだる！」

僕の心情を勝手に吐露しながらも、実人は川の方を向いたままだつた。遠くを見るように目を細める。

「いいじゃん、カツコわるくてもさ。理由がどうあれ、立てるんだ。オレなんか逆立ちしたつて、一球も投げられないんだぜ。それに比べたら、ぜんぜんマジだよ。なあ？」

小さくつぶやいた実人の言葉が、川音にまぎれ聞こえてきた。

「そうかな」

「そうだよ。だつて、あの甲子園なんだぜ」

また同じ会話の繰り返しだ。

甲子園か……。

縁のツタに覆われた、あの姿が自然に浮かんだ。

いつたい、あの場所はなんなんだろ？ 野球をする者もしない者も、日本人なら皆知つていて。その名を言つだけで、力づくで納得させられてしまう圧倒的な存在。

あそこで最高の気分を味わえられるのは、頂点に立つた一校だけ。全国およそ4000校もある出場校の中のたつた一校にすぎないのだ。

川から吹く風のせいだろうか。急にヒヤリと身体が冷えるのを感じる。

そうだな。実人の言つたとおり、僕はぜいたくなのかもしれない。

すると、チリンチリンと軽やかなベルの音が飛んできた。音が聞こえてきた左手の方を見上げる。キキッとブレークを引いて止まつた自転車の影。ウチの学校と同じ制服を着た女子が、自転車に乗つたまま僕たちを見下ろしていた。

「半田クン、こんなところで何やつてんの。帰らないの～？」

僕たちの野球部のマネージャー、近藤さんだつた。長い髪が風にそよいでいる。

じつは、下級生のくせに気が強くてしつかり者で、僕たち上級生を「クン」呼ばわりする生意気な彼女を、僕は苦手としていた。彼女が監督の姪御さんだというせいもある。

だからといって、上級生の威信を見せないわけにはいかない。「クンじゃない。センパイと呼べ。そつちこそ遅いじゃん。ヒツクに部活は終わつただる」

その彼女にヤローと一緒にガキっぽく石を投げているところを見られてしまつて、本当のところムチャクチャはずかしかつた。赤い頬を夕日がかくしてくれたのは助かつたけれど、マジでヤバい。

「女子は男子と違つて、着替えるのに時間がかかるもんなんですよ」

口調を変え、ぶっきらぼうに答える僕と彼女を見比べて、実人が愉快そうに顔を歪めた。また始まつた、とでも言いたげな感じでムカつぐ。

「てめ、あとで覚えてるよ。

と、ヤツに一警をくれてやつたときだつた。思いがけないことが起つた。「あつ」と氣づいたように近藤さんが叫んだのだ。

「わたし、テレビでちやんと見るからー 開会式がんばつてね、半田セ・ン・パ・イー！」

「へ、センパイ？」

彼女の口から出た言葉が信じられなくて、思わず僕はポカンと口を開けてしまつた。

「じゃあ、さいならー！」

と言つと、僕の反応をチラリとも確かめないで真つ直ぐ前方に視線を向け、彼女は再び自転車をこぎだした。

風に制服のスカートがヒラリと舞い上がる。膝まで裾がめくれあがつて生足が見えてしまつたが、どうこうわけがまったく気にして

いないようで。ぐんぐんスピードを上げて、左手の手の上の遊歩道を、あつという間に走り去ってしまったのだ。

僕たちは、彼女が去っていく様子をあぜんと見送るしかなかつた。

「なあ、半田」

「なんだよ、実人」

「あのよ、見えたか？」

「見えてねーよ」

「半田センパイだつてよ。セ・ン・パ・イ！」

「つるせー！」

ボールではなくて会話だつたけれど、僕たちは野球部員らしくキヤツチボールをした。彼女の背景に夕焼け空が広がつていて、星があちこちで光りだしたのに気づく。とてもキレイだ。

「近藤のヤツ、オレのことガチ無視してたな。ま、イイや。とりあえずよかつたな、半田。オレ以外にもおまえの行進を楽しみにしている人間がいて」

「ああ、わかつたよ。実人、ラーメン食いに行こいつぜ。おじつてやるから」

「げつ、マジかよ。やりい。催促したみたいでわるかつたな。そついつつもりじやなかつたんだけどさ」

「つべこべ言うな。オラ、さつさと行くぞ」

くつそう。これ以上、面白おかしく言われてたまるか。神か悪魔のどつちかが、僕をハメようとしているんだ。なんで僕なんだよ。他のヤツらだつているのにわ。

実人を追い立てるようにして橋の袂にある階段をのぼり、僕たちも河原をあとにした。

ふと何気にふり返り、一度だけ空を仰ぐ。

明日も、よく晴れそうだ。そう思つたとたん気分がフツと軽くなつて、星のよき明かりがひとつ、僕の中に灯つたような気がした。

(DZN)<sub>E</sub>

(後書き)

読んでくださった皆さん、ありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0979y/>

---

星のような明かりがひとつ

2011年10月31日19時20分発行